

Ouroboros

<http://www.um.u-tokyo.ac.jp/>

Jan. 20, 2023

東京大学総合研究博物館ニュース

The University Museum, The University of Tokyo



絶滅危惧種・オオルリシジミの累代飼育標本（スクール・モバイルミュージアム「蝶 ー魅惑の昆虫ー」展より）。
現在ではこの飼育技術が生かされて、各地で保全が行われている。

Ouroboros

スクール・モバイルミュージアム

蝶 —魅惑の昆虫— Butterflies —Fascinating Insects—

矢後勝也¹・遠藤秀紀²

東京大学総合研究博物館は、本学に隣接する文京区教育センターとの連携により、2013年からスクール・モバイルミュージアム事業を展開してきた。この事業は最近の先端研究の動向や本館教員の研究成果を「展示」で発信しながら、科学的な好奇心を芽生えさせたり、教科書では得られない学習効果に結び付けたりすることを目的とした教育プロジェクトである。文京区教育センター2階には、広さ約12×8×2.6 mの大学連携事業室を設けて、ここを展示スペースとしながら年2回程度のスクール・モバイルミュージアム展を続けてきた。令和4年度最初となる本事業では、2022年5月13月～10月31日の5ヶ月以上に及ぶ日程で、「蝶 —魅惑の昆虫—」展を開催した。

蝶（チョウ）といえば、艶やかな色彩を輝かせて飛ぶことから、よく目立ち、可憐で美しい昆虫の代表であり、時には人の心をひきつけて感わずほど、魅力

いっぱいの昆虫でもある。翅の色彩・模様多様性はどのように進化してきたのか、不思議に思う方も多いだろう。実は種間・種内・雌雄の識別、敵に毒があることを示す警告色、身を潜めるためのカムフラージュなど、実は生きるための術から生じてきたと考えられている。今回の展示では、蝶に魅了されて長く研究を続けてこられた元文部大臣の故・鳩山邦夫氏により採集・飼育され、東京大学総合研究博物館に寄贈された多くの蝶類標本とその業績に触れながら、翅の多様性を創り出した進化の軌跡のほか、分類、生態、行動、遺伝などの様々な蝶類研究を紹介した。また、蝶が教えてくれる近年の生態系破壊や地球温暖化、外来種などの環境問題について、自然との共生も見据えながら解説した。このような美しく魅惑的な存在感を放つ蝶に惹かれながら、科学的な好奇心や探求心を育んでもらうことを趣意としている。以下に具体

的な展示の内容を述べる。

まず展示品を概説すると、主に中心から手前半分は外国産蝶類の標本、奥側半分は日本産蝶類の標本を展示しており、ドイツ箱84箱に収められた計5,023頭の蝶類標本からなる（図1）。これらのほとんどが鳩山氏ご自身により飼育または採集されたもので、特に日本産の9割以上は飼育標本である。鳩山氏と言えば、「飼育」の技術開発に関する研究者として高名で、「人工繁殖のための基礎研究」を信条としながら、常に飼育法の確立を目指して蝶に取り組みされていた。また、飼育なら自然からの搾取を最低限に留めながら蝶と付き合えること、仕事柄多忙のために飼育なら好きな蝶と毎日接することが可能なこと、そして、卵や幼虫を育てながら蝶が飛ぶ風景を思い浮かべられることなども、鳩山氏を飼育に向かわせた所以だったようである。

今回の展示を順路に沿って右側入口か



図1 「蝶 —魅惑の昆虫—」展の展示場の様子。元文部大臣・鳩山邦夫氏旧蔵コレクションで構成された多くの蝶類標本を展示した。



図2 展示場の右壁面に連なる12の解説パネルとそれに関連する蝶類標本の展示。解説パネルには鳩山氏の経歴や最近の蝶類研究に関する概要を示した。

ら反時計回りに説明していくと、右壁面には鳩山氏の経歴を示した解説パネルの他、最近の蝶類研究の内容とそれに関連する標本を紹介した11の解説パネルが連なる(図2)。まず導入部となる「鳩山邦夫氏の経歴」では、本職の衆議院議員を40年近く務め、その間に文部大臣、労働大臣、法務大臣(2期)、総務大臣、内閣府特命担当大臣を歴任したこと、幼少時に兄・由紀夫氏(のちに総理大臣を歴任)と蝶を追いかけて蝶の魅力に取り憑かれたことなどを記述した。次に蝶類研究の1つ目となる表題「チョウのガの違いとは？」では、翅の付け根に聴覚器官がある夜行性チョウ類のシャクガモドキを中心にチョウ類の形態的特徴を挙げ、さらに最近の分子系統樹を示しながらチョウ類の系統的位置を示した。続く2つ目の表題「枯葉や岩に化ける蝶の擬態」では、チョウの斑紋は決まったブロック構造の組み合わせで構成されており、この考えを基に枯葉模様の進化を解き明かした東京大学大学院新領域創成科学研究科の鈴木誉保博士による研究を紹介した。3つ目の表題「チョウの翅の模様多型を制御する遺伝子」では、産業技術総合研究所の二橋 亮博士の協力を得て、ドクチョウ類の斑紋多型とそれを制御する遺伝子の研究およびベニモンアゲハ♀の擬態に関わる斑紋多型遺伝子の研究を概説した。4つ目の表題「深層学習を利用したチョウの擬態の定量化」では、AIを用いた深層学習により擬態の類似度を数値化して評価し、最終的には捕食者である鳥の判断はどのようになっているのかを探る研究の概要を示した。これは東京大学大学院農学生命科学研究科に所属する博士課程院生・網野 海氏を中心とした遂行中の研究である。5つ目となる表題「蝶斑紋の地理的変異に関する定量的考察と食草・位置推定」では、AIの深層学習による画像認識技術を用いてギフチョウの斑紋と食草および地理的情報との関連性を定量的に考察するためのシステム構築を目的とした研究を紹

介した。6つ目の表題「シルビアシジミ属の分類と分子系統地理」では、これまで分類が不安定だったシルビアシジミ属の分子・形態双方により分類学的再検討を行い、属内3種とするのが妥当と結論付けたことや日本産シルビアシジミには2種いることを明らかにし、さらに本属内の種分化とその分岐年代、分布の形成過程の推定を行った研究を解説した。7つ目の表題「渡りをするチョウ“アサギマダラ”など」では、アサギマダラやオオカバマダラ、イチモンジセリのような渡りをする昆虫を取り上げ、特にアサギマダラでは亜種分化とその分布形成過程を推定した最新の研究概要を取り上げた。8つ目の表題「自然の力で飛来する蝶」では、国外から台風等によって日本に運ばれてくる迷蝶やその一時発生、そして定着の例を挙げながら、鳩山氏が採集した迷蝶の標本を披露した。9つ目の表題「地球温暖化と食樹の植栽による蝶類の北上」では、気候変動と人為的攪乱の影響により分布が北上しているナガサキアゲハとクロマダラソテツジミを例に挙げて、現状への警告と対策等について訴えた。10番目の表題「蝶における外来種の分布拡大と在来種への影響」では、国外からの人為的導入により日本

に侵入・定着したアカボシゴマダラとムシクロツバメシジミの分布拡大と悪影響について述べ、その危険性や対策等を概説した。右壁面最後となる11番目の表題「絶滅しそうな蝶たちを守る」では、種の保存法やレッドリストの趣旨とその役割を記すとともに、種の保存法で定められた国内希少野生動植物種に指定されている蝶類の展示標本とその保全対策を紹介した。

次に展示場奥の壁面には2つのアクリル展示ケースを左右に設置し、その間の中央部には動画が流れる映像機器を用意した。まず右側の展示ケースでは、表題「蝶の採集方法と標本作製」および「蝶の飼育法とその意義」に関する展示を行った。前者では補虫網による見つけ採りやトラップ採集、蝶の習性や活動時間を熟知した採集法、採集・飼育した標本の作り方とラベルの重要性などを記述するとともに、実際に鳩山氏が使用した採集道具や標本作製器具を展示した(図3)。後者では鳩山氏が編み出した様々な飼育法や鳩山氏ご自身の蝶類研究に関する業績を紹介するとともに、実際に用いた飼育道具や代表的な著書・論文・報文を展示ケース内に配置した(図3)。一方、左側の展示ケースでは、右側に表



図3 「蝶の採集方法と標本作製」および「蝶の飼育法とその意義」のパートでの展示品。実際に鳩山氏が使用した採集・飼育道具や鳩山氏の代表的な著作などを展示した。

Ouroboros

題「絶滅危惧蝶類を中心とした飼育技術の開発」と「東南アジアのシジミチョウ科チョウ類」を展示した。前者では飼育の天才とも称された鳩山氏が累代飼育を重ねていた子孫やノウハウが用いられて絶滅寸前だった蝶が復活して保全が続けられているオオルリシジミ（表紙）の事例に加え、他にも飼育技術を開発した絶滅危惧種のヤマキチョウ、ヒメシロチョウ、ヒョウモンモドキ、リュウキュウウラボシシジミ、ルーミスシジミなどと合わせて飼育標本を展示した。後者では当時鳩山氏により立ち上げられた「東南アジア大陸産シジミチョウ科図鑑」制作プロジェクトの経緯とそれに携わった研究者について概略を記し、合わせて珍種・イノレスボルネオフタオシジミを含む多くのシジミチョウ類の標本も並べた。また、蝶類研究の業績に富んだ鳩山氏に因んで名付けられたハトヤマミドリシジミ（図4）も展示している。左右アクリル展示ケース間に設置した映像では、鳩山氏の蝶にまつわる経歴と業績をまとめた「蝶と共に歩んだ鳩山邦夫」と、開発や温暖化、外来種の影響などにより変動する蝶類の野外映像を集めた「環境変動を生きる蝶たち」の二本立ての動画を上映した。

入口から見て左側壁面には、最奥とな

る右側（前述の左側展示ケースの左側）に鳩山氏の兄で元総理大臣の鳩山由紀夫氏より頂いた機関紙「友愛」への寄稿文を会期中から展示した。この寄稿文には幼少・学生時代にご兄弟で図鑑の蝶を覚えたり、共に蝶を追いかけたりした思い出や、その後のお二方の蝶との関わり方等が楽しく綴られている。さらに左側壁面の中央には、表題「日本の蝶・世界の蝶」の解説パネルを吊るし、鳩山氏が幼少期から関わってきた蝶との向き合い方の移り変わりと国内外での蝶の生息地の変化、さらには多くの標本を収集する理由などを示した。この解説パネルを挟む形で、左右にそれぞれ3×6列となる計36箱の標本箱が敷き詰められた標本棚を壁面に設置した。右側の標本棚には、鳩山氏が思い入れのあるオオウラギンヒョウモン（図5）、オオイチモンジ、キベリタテハ、オオムラサキ、スミナガシ、クモマツマキチョウ、スジボソヤマキチョウなどの日本の蝶を展示し、そして左側の標本棚には、擬態関係にあるアカネアゲハとセンペリーアケボノアゲハの他、コウトウキシタゲハ、メガネトリバネアゲハ、ホッポアゲハ、ルリモンアゲハ、オビクジャクアゲハ、レインワルドイメスシロキチョウ、ダンフォルディフタオチョウなど、東南アジア産を

主とする海外の蝶を出展して、標本が持つ圧倒的な美麗さと妖艶さを華々しく表した。

展示場の入口に近い廊下側壁面では、表題「オス・メスのちがいは？」、「蝶はお尻で何をみる？」、「蝶の色について」の3つの解説パネルを用いながら雌雄の形態・機能の違いや斑紋・色彩の発色について解説するパートを設けた。特に交尾行動や産卵行動で働く尾端光受容器に関する「蝶はお尻・・・」のパネルは、発見者である総合研究大学院大学の蟻川謙太郎教授による解説である。また、ここでは種間や雌雄で異なる蝶の交尾器を双眼実体顕微鏡で比較できたり、美しく輝いたベレイデスモルフォやミヤマカラスアゲハ、メスアカミドリシジミの翅の構造色をルーペで観察できたりする体験コーナーも設置し、昆虫への理解を深める工夫も施した。

この展示に隣接した位置には、表題「書籍とデータベース」の解説パネルを掲げながら、鳩山氏の執筆による蝶類関連の書籍、本展示の企画者・矢後の執筆・監修による書籍や子供向けの図鑑、昆虫関連の当館標本資料報告を本棚に収納し、手にとってその場で読めるスペースを作った（図6）。さらに当館で作成が進められている画像付き標本データベース



図4 鳩山氏に献名されたベトナムに産するハトヤマミドリシジミ *Chrysozephyrus hatoyamai* Fujioka, 2003.



図5 標本箱に敷き詰められた絶滅危惧種オオウラギンヒョウモンの飼育標本。

の役割とその活用について解説すると共に、PCモニターも設置して実際に当館のホームページから見られる「東京大学総合研究博物館・博物館データベース (UMDB) 昆虫」のサイトを自由に閲覧できるようにし、データベースの重要性を伝えるための研究発信の場も提供した(図6)。ちなみに本サイトは日本昆虫学会が昆虫学の発展に貢献する優秀なウェブサイトを作成した会員に表彰する「あきつ賞」を今年度受賞している。

この他に、展示関連イベントとして計6回の「昆虫学者による講演会」を開催した。第1回は企画者の矢後による演題「映える「蝶」の魅力と研究—鳩山邦夫コレクションから—」で、美しい昆虫の代表である蝶の多様性やその魅力について様々な研究や環境との関わりをふまえながら紹介・解説が行われた。第2回は蝶の幼生期研究で有名な原田基弘氏による演題「アジア産チョウ類の生活史—未解明の幼生期を追って—」で、小学生の頃に蝶の幼虫に触れ、やがて国内からアジアに棲む蝶の生き様に関心が移り、その探索を続けてきた原田氏自身の軌跡が紹介された。第3回は蝶の斑紋形成を数理情報学から解き明かす鈴木誉保博士による演題「枯葉・岩・コケそっくりに化ける蝶の擬態—見えてきた進化の法則

—」で、枯葉、岩などに擬態する蝶の模様が他の蝶と同じくブロックの組み合わせを変えて進化してきたことを示す研究が語られた。第4回は蝶類の幼虫形態の研究で知られる手代木求氏による演題「誰にもわかるタテハチョウ幼生期形態からの分類」で、蝶の幼虫は形態を見ただけで明確な分類ができ、近年の分子系統の解析結果とも一致することをがタテハチョウ科の研究で紹介された。続いて第5回はセセリチョウ科の分類に関する世界的権威の築山 洋氏による演題「キラキラ輝くジャングルのセセリチョウ」で、一般に地味な模様のセセリチョウも熱帯のジャングルでは金属光沢を持つ種が多くなる理由が解説された。第6回は埼玉大学名誉教授でファーブル昆虫記の訳者で著名な奥本大三郎先生による演題「蝶の寿命—食べる、そして、恋する一生—」で、蝶の寿命を人間の老化ぶりと比較してその違いを考える講演が行われた。

最後に鳩山氏が強く抱いていた理念について語りたい。本業は国会議員であったが、「学問」のレベルで生物と接している点では、数多の議員の中でも稀有な存在であったと思われる。あまりに自然に対して純粹で実直だったため、時に誤解される発言も見られたが、実は滅びゆく蝶を守りたいという思いに端を発し、

自然を知ること、人間はその自然の一部にすぎないことを知ること、そして生物多様性保全こそが人類存続のための最善の道と考え、自身の義務・使命として「自然との共生」を掲げて生き抜いたのであろう。このような鳩山氏の信条が、全身全霊を込めて築き上げられた同氏の蝶類コレクションに引き継がれている。

今回の展示開催にあたり、鳩山邦夫氏の奥方・鳩山エミリー夫人には貴重な本コレクションをご寄贈下さり、特別なご援助を賜った。邦夫氏のご息女・鳩山華子氏と女婿・聡一氏には寄贈標本移送の際に多大なご支援を頂いた。邦夫氏のご令兄・鳩山由紀夫氏には寄稿文掲載の機関紙をご患与賜り、この寄稿文の展示をさせて頂いた。日本鱗翅学会、日本蝶類科学学会、日本蝶類学会、ファーブル昆虫館「虫の詩人の館」からは本展示に関するご後援を頂いた。原田基弘、鈴木誉保、手代木求、築山 洋、奥本大三郎の各氏には本展示の関連イベント「昆虫学者の講演会」への登壇をご快諾頂いた。また、勝山礼一郎と紙屋(伊藤)勇人の両名には展示の副指揮としてご助力頂いた他、下記の諸氏からも展示の設営・解説等で多くのご支援を賜った。網野 海、蟻川謙太郎、井上暁生、大澤夏子、桶田太一、徐 堉峰、瀬戸山知佳、中村 涼、新津修平、平川 翼、二橋 亮、牧田 習、松尾隆嗣(五十音順、敬称略)。文京区教育センターの木口正和、保坂美加子、阪本晋一、横内理恵(敬称略)をはじめ、多くの方々にもご協力頂いた。本展示にはJSPS科研費(21H02215, 21HP8022, 21J20942, 22HP7005)とJST戦略的創造研究推進事業ACT-X(JPMJX21A2)の助成および東京大学デジタルアーカイブズ構築事業による成果報告も含まれている。末文ながら、各氏・各団体に心よりお礼申し上げます。

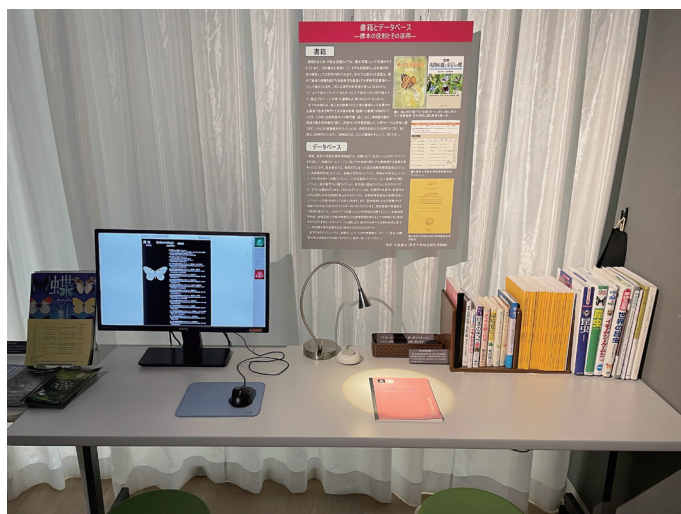


図6 「書籍とデータベース」の展示パート。右側の本棚では鳩山氏や本展示の企画者・矢後の執筆・監修による蝶類書籍を、左側のPCモニターでは「東京大学総合研究博物館・博物館データベース (UMDB) 昆虫」のサイトを自由に閲覧できるようにした。



¹本館講師/昆虫自然史学・保全生物学、
²本館教授/比較形態学・遺体科学)

基金事業

「東京大学コレクション未来基金」の発足

西秋良宏

はじめに

2022年7月、総合研究博物館は「東京大学コレクション未来基金」事業を開始しました。東京大学コレクションとは、本学が1877年の開学以来、研究や教育のために蓄積してきた学術標本群をのことです。本事業は、このコレクションを確実に維持、活用、発展させるため、ご寄附を募り基金として運用することを目的としています。コレクションが未長く学術を支え、その源泉となることを念じ、「未来」という語を基金の名前に加えました。

事業の趣旨はリーフレットやホームページでも示していますが、書ききれなかったことも含めて、改めて説明させていただきます。

総合研究博物館の現在

総合研究博物館は1966年に発足した総合研究資料館を前身として、1996年に改組、開館しました。2020年には名称を変えないまま再度、改組し、現在では東京大学の学際融合研究施設の一つとして活動しています。学内に蓄積された

学術標本、すなわち東京大学コレクションの収集、保管、活用、公開、そして、その基盤をなす最先端の研究をおこなう。そうした学術標本を基軸とした、東京大学では類を見ない多面的学術活動をおこなう組織として発展してきました。

同時に、全国初の研究教育型のユニヴァーシティ・ミュージアムとして誕生した経緯を十分にふまえ、大学ならではのミュージアム活動を先導する試みを多数実践してきました。例えば、発足当初から今日のデジタル時代を見すえた「デジタルミュージアム」研究を提案しつつ（1996年～）、一方で、大学の収蔵標本を学外に展開する「モバイルミュージアム」という新たな公開発信実験も推進してきました（2006年～）。後者の事業は、都心のビジネス空間さえも学術標本で埋め尽くす東京駅前の「インターメディアテク」開館にもつながっています（2013年～）。

総合研究博物館が収蔵している標本は、地学（鉱物、岩石・鉱床、鉱山、地史古生物、地理）、生物（植物、森林植物、薬学、動物、水産動物、人類先史、医学）、

文化史（考古、建築史、考古美術、美術史、文化人類）など多岐の分野にわたります（図1）。それらには、太陽系の起源を物語る隕石や小惑星で採取された物質、動植物の新種を定義する元となった最初の発見標本、ヒトの進化や日本人のルーツをさぐるために欠かせない人類化石、さらには世界最古の文明が残した遺物、そして文字に書かれなかった日本の歴史を伝える文物などが多数、含まれていて、総数は400万点以上。このコレクションは、まもなく創立150周年を迎える東京大学の学術の歩みや拓がりを示す物証であるだけでなく、現在進行中の研究教育をささえる基盤として次代に引き継ぐべき唯一無二の財産です。

高度な研究をかつて導き、今後も導くに違いない、それら学術標本を独創的な展示手法でもって一般の方々にもご覧いただくべく、総合研究博物館は、展示技術の開発にも取り組んできました。お堅い国立大学とは思えないようなスタイリッシュなデザインをもって展示空間を構成したり、最新のデジタル技術を活用したりする一方で、明治～昭和初期、帝



図1 歴史的な収蔵標本

左) 大森貝塚出土の土器。1877年にE.モースにより発掘され、「縄文時代」の存在が明らかになった。国指定重要文化財；中) 1881年にH. E. ナウマンが記載したナウマンゾウの最初の化石；右) 世界最後の「幻の大蝶」と呼ばれるブータンシボリアゲハの標本。2011年にブータン国王より寄贈された。

国大学時代の本学で用いられていたアンティーク調の什器を再活用した展示をも披露したりしてきたところです。

基金設立の背景と目的

「東京大学コレクション未来基金」は、そのような総合研究博物館の活動基盤である学術標本の保存と発展を推進するものです。ご寄附によって実施する事業は、大きく二つです。

まずは、コレクション収蔵環境の改善です。1966年の資料館創設時の収蔵標本数は総計約130万点と見積もられていました。研究者がそこで研究をやめていれば、その数は増えなかったでしょう。しかし、収蔵標本数は現在では、その3倍を超えています。研究が進展する限り、コレクションは増加するものです。新たな課題の解決のためには新たな標本が必要になることが常だからです。

そこで生じる問題は、コレクションの収蔵スペースです（図2）。実は、総合研究博物館の収蔵庫面積は資料館時代末期の1993年以来、全く変わっていません。増加する標本を収蔵するためにキャンパス外の土地や建物をお借りしてすらいのが現状です。保管場所に困っているのなら、図書のようにデジタル保存したらどうかとの声は多く聞こえますが、実物標本はそう簡単ではありません。物質の内部構造や成分、生物の遺伝情報、

環境変遷の指標物質、ヒトが作った道具の素材や製作法、用法などを知るための新たな分析手法が続々と開発されている現在、専門研究者が学術的手続きをもって収集した実物標本の保存は近々にも、また未来のためにも不可欠です。

抜本的改善のためには施設の拡充、あるいは自前の新施設建造が必要なことは明白です。同時に、標本整理を加速化させ既存収蔵庫の効率的利用を図ること。それらに、基金を活用させていただきま

す。もう一つの用途は、本郷本館展示機能のバージョンアップです。総合研究博物館の展示は、既に言及したインターメディアテクの他、小石川植物園内にある重要文化財建築を利用した分館、自治体連携先である文京区教育センター、さらには国内外モバイルミュージアムなど、各地で広く展開していますが（HP参照）、それらで公開している標本を収集、整理、研究し、展示コンテンツを作成する基地は本郷本館にあります。そうしたコレクションの生成、公開過程そのものを見ていただくという意図のもと、2016年に、本郷本館の展示場を一新し、「UMUTオープンラボ」という常設展示を設けました。標本の収蔵現場や、それらを分類整理したり分析機器を操作したりする研究者の作業を実際に見学できるユニークな施設として好評、これまでにいただい

ています（図3）。これを、さらに進化させ、よりよい環境で研究現場を観覧いただきたいと私たちは考えています。

現在の展示場は学内利用を前提とした資料館時代の展示場をひきついでいるため、一般の方々を広く受け入れるのにふさわしい構造となっていません。そのため、受付を設けるスペースもままならず、かつ、展示空間とバックヤードを区切るセキュリティにも問題をかかえています。また、玄関部からの外気遮断が出来ないことによって展示可能な標本が限られていること等々、問題山積の状況にあります。

総合研究博物館本館は、赤門がある本郷キャンパスに位置しています。日本の学術の歴史と伝統を象徴するキャンパスにある東京大学の旗艦博物館として、来館者の期待に添える環境の充実、整備につとめていく所存です。

おわりに

コロナ禍が始まって以来、ヴァーチャル、オンライン化が加速度的に進行しています。この社会変化において、DX（デジタル・トランスフォーメーション）を推進する意義は今日、明白です。しかし、一方で、あるいは、だからこそ、学術的デジタルデータの元をなす唯一無二の実物標本の安定的継承をになう総合研究博物館の責任が増したことを痛感していま



図2 収蔵室の一例。



図3 「UMUTオープンラボ」常設展示2階の作業スペース。

Ouroboros

す。太古の昔以来、学術を導く原動力は「実物」を目にした時の好奇心や感動であったはず。私たちは、そのような環境を学内に創出し、維持、発展させていく責務を負っています。

国立大学の予算が増えなくなって久しい中ではありますが、東京大学コレク

ションの成長が止まることはありません。コレクションを継承し、発展させ、未来の学術を切り開く基盤をつくるため設立したのが本基金です。成果は、世の中をびっくりさせるような研究や魅力的な展示公開によって広く示していきます。本基金につき、皆様のご高配をたまわ

りたく、心よりご支援、ご理解、お願い申し上げます。



(本郷本館・インターメディアテク館長
／先史考古学)

東京大学コレクション未来基金

本基金にご寄付いただくと、税制上の優遇措置に加えて、以下の2種の特典が適用されます。

特典① 総合研究博物館より

ご寄付くださった全ての方に、当館イベント等のご案内を差し上げます。

●10,000円以上のご寄付

- ・サポーターズクラブ会員証発行
- ・講演会・バックヤードツアー等（オンライン）ご招待

●300,000円以上

上記に加え、・展覧会式典（図録つき）・対面イベントご招待

●1,000,000円以上

上記に加え、研究者がアテンドする博物館内プライベートツアーご招待（日程ご相談、同伴者可）

※詳しくはウェブサイト（<https://utf.u-tokyo.ac.jp/project/ptj146>）をご覧ください。

※ご寄付から3年間の期間中の特典です。

※継続寄付（毎月など）の場合は、累積額が達した時点で対象とさせていただきます。

特典② 東京大学基金より

内容は以下にてご覧いただけます。

<https://utf.u-tokyo.ac.jp/privilege>

ご寄付の申込方法

東京大学基金Webサイトからお申込みください。

<https://utf.u-tokyo.ac.jp/project/pjt146>

※クレジットカード決済、インターネットバンキング決済、銀行振込等からお選びいただけます。



ご寄付についてのお問い合わせ先

東京大学基金事務局

〒113-8654東京都文京区本郷7-3-1

E-mail : kikin.adm@gs.mail.u-tokyo.ac.jp

Tel : 03-5841-1217（土日祝除く） Fax : 03-5841-1219

小石川分館館外ラボラトリー

外部環境での博物館活動 —小石川分館における「ソトラボ」の試み

松本文夫¹・鶴見英成²・成瀬晃司³・金崎由布子⁴・永井慧彦⁵

総合研究博物館小石川分館で2022年3月から「ソトラボ」と称する館外ラボラトリー活動が始まった。本稿ではその企画経緯と実施内容について報告する。

小石川分館は2021年1月から臨時休館中である。旧東京医学校本館（1876年創建）を前身とする当館は、2020年に行われた耐震基礎診断で耐震性能が不十分である可能性が判明した。この結果から耐震性能の確保が確認できるまでの間、一般公開を中止することになった。施設と収蔵物の維持管理は続くものの、スタッフは建物から退去し、主要業務は本郷キャンパスの分館分室で行われている。今後の流れとしては、旧東京医学校本館の保存活用計画が策定され、さらなる耐震診断による調査検討を経て、耐震補強・修理工事の対応がなされる見込みである。

本郷本館、インターメディアテック、宇宙ミュージアムTeNQとならび総合研究博物館の4館体制の一翼を担ってきた小石川分館は、こうして長期にわたり非公開となる。この状況を受けて、当館の西秋良宏館長および遠藤秀紀教授より、小石川分館において何らかの博物館活動を継続することが提案された。一般の来場者を建物内に入れることはできないが、外部環境を生かしたイベントであれば開催可能である。小石川分館に隣接する小石川植物園（理学系研究科附属植物園）との連携も考えられる。

小石川分館の周縁部や小石川植物園の庭園をいかした見学・解説・上映などの公開活動が検討された。その内容にはいくつかの方向性が考えられる。第一に東京大学最古の学校教育施設としての特性をいかした「建築案内」、第二に総合研

究博物館に収集された学術標本を介して研究成果を知る「標本案内」、第三に映像／写真の記録からさまざまな分野の研究者の活動に迫る「映像講話」である。

さらに、植物園と博物館のコラボレーションによるガイドツアーや屋外シンポジウムなどの企画も考えられる。外部で実施するイベントなので、梅雨、盛夏、厳冬の時期は避け、雨天時は延期し、およそ1～数ヶ月に一度の頻度で実際の企画を立てることになる。

博物館活動の名称は「ソトラボ」とした。ソト＝外部からの視点に着目した博物館の新しい公開実験と位置づけている。英文略称では分館(Annex)のexを「外部」の接尾辞と読み替え、AnnEX Lab.と表記した。正式名称は「東京大学総合研究博物館小石川分館館外ラボラトリー」(UMUT Koishikawa Annex Exo-Lab.)である。

一般に博物館はモノ・情報・人間が集まる独立施設である。総合研究博物館では基幹となる4館のほかに、小さな展示ユニットによる「モバイルミュージアム」を国内外の210ヶ所で展開してきた。

これは博物館の存在形式における「集中独立型」から「分散連携型」への拡張である。ソトラボはそのさらなる進化形といってよい。モバイルミュージアムではモノが外に移動するが、ソトラボでは人間が外に出て動くことに特徴がある。博物館における内から外への転換、静態から動態への変化をともなう「外部動態型」ともよべる運用である。これまで施設内部に形成されてきた濃密な知のミクロコスモスは、集約されたモノたちが元来棲息していた世界へと開かれ、人々を積極的に外部環境へといざなう。対象領域を再定義することによって、博物館概念の新しい境地に踏みだせる。博物館と植物園が一体化した現在のロケーションにおいては、「ガーデンズ・アンド・アーカイブス※」としての醸成も期待される。(※名勝及び史跡「小石川植物園(御薬園跡及び養生所跡)」保存活用計画、2022年3月)

ソトラボの会場候補は、小石川分館の池側の外部空間、茗荷谷門周辺の広場／駐車場、植物園の日本庭園などである。



図1 ソトラボ第2回「小石川分館を外部から観る」の実施風景。

Ouroboros

大学施設部によるポーチの応急修理工事が予定されているので、会場設営には臨機応変な対応が必要になる。参加登録はウェブによる事前予約制とし、定員は15名（現在は20名）とした。イベントの開催時間は夕方の30分間である。以下に、これまでに実施した3回の概要を報告する。

ソトラボの第1回は2022年3月25日（金）に開催された。鶴見英成助教（現放送大学准教授）による「インカの旅路、アルパカ肉の味」は、南米ペルーの高地で2010年に実施した踏査の写真から構成したフィルムトークであった。鶴見助教は考古学の課題として古代における交通網に関心を持っていたが、文化人類学者たちとともに現代の高地の村々をめぐる、荷を運ぶリヤマなどの飼育状況や、そこに暮らす人びとの様子を間近で見ることにした。多数のリヤマで編成した伝統的なキャラバンを実見したり、その移動ルートの情報を聞いたり、ルート上の遺跡を訪ねたりする中で、古代の重要な交易品である黒曜石の産地を新たに見つけ、交易についての新たな視座を得た。人びとの衣食住、リヤマやアルパカの料理など、論文には反映されない研究現場の体験を写真や映像で示し、会場には採取した黒曜石の実物や、アルパカの毛皮を手でさわられるよう配置した。



図2 ソトラボ第1回のチラシ。

第2回は4月22日（金）に実施された。松本文夫特任教授による「小石川分館を外部から観る」と題する建築ウォークであった。植物園の日本庭園側から華やかなツツジに囲われた小石川分館の外観を鑑賞し、これまでに当館がたどってきた来歴を振り返った。小石川分館の建物は明治9年（1876）に東京医学校本館として現在の本郷キャンパス内に建設された。1911年には赤門の脇に移築されて史料編纂掛となり、このとき山口孝吉の改築設計により梁間と塔屋を縮小してほぼ現在の姿になった。1969年には植物園の現在地に移築、1970年に重要文化財に指定され、2001年から小石川分館として一般公開されてきた。東京大学で最古の学校教育施設であり、明治初期の擬洋風建築の特徴を残す歴史遺産である。2度の移築を経て機能と意匠を少しずつ変えながら生き長らえた施設である。実物と古写真／図面を見ながら、その「建築の持続」のありさまを通覧した。

第3回は5月27日（金）に実施された。本学埋蔵文化財調査室の成瀬晃司助教による「小石川御殿の堀遺構」と題する発掘トークであった。小石川植物園を含む一帯は、天和元年（1681）頃から正徳3年（1713）まで、幕府の御殿「小石川御殿」だった。元禄11年（1698）には西側および北側に拡張され、四周には幅約10間



図3 ソトラボ第2回のチラシ。

の堀と土居・石垣・多門が廻り、北西および南西角には隅櫓が築かれた。堀には千川上水から水を引き、御殿坂側には五段の瀧があったという。成瀬助教は小石川御殿の前史、成立、拡張、その後の経緯を紹介し、自らが関わった発掘の研究成果を写真と図面で解説した。堀堀位置の推定図を示し、小石川御殿図（文京ふるさと歴史館所蔵）などの古図からその構成を読み解いた。堀を穿って生じた土を盛って内側に土塁を築き、その上に塀を巡らせたのである。現在の風景に重ねながら、城郭を彷彿させる御殿の姿に想いをはせた。

各回ともに活発な質疑応答が行われ、小規模ながら密度の濃いイベントとなった。ソトラボは博物館のハコモノの概念を反転する試みであり、施設の内部に集中蓄積する志向とは逆向きであるようにみえる。しかし外部環境に遍在する知の痕跡に向き合うという点において、この試みが博物学の原点に通じていると考えたい。



¹本館特任教授／建築学、²放送大学准教授／アンデス考古学・文化人類学、³本学埋蔵文化財調査室助教／日本近世考古学、⁴本館助教／アンデス考古学、⁵本館特任研究員／金銅仏铸造



図4 ソトラボ第3回のチラシ。

展示紹介

東京大学本郷キャンパスの 弥生・古墳時代 —近年の出土品から—

三木健裕

2021年12月16日から3日間、文京シビックセンター1階ギャラリーシビックにおいて、文京区内の博物館が集合し展示を行う企画、文京ミュージックフェスタが開催された。本館は東京大学埋蔵文化財調査室の協力のもと、東京大学本郷キャンパスから出土した弥生時代、古墳時代の遺物に関する展示を行った。以下では、展示に関する概要と来館者からの反応を述べていきたい。

文京区および東京大学周辺は、弥生時代研究の歴史と深い関わりがある。1884（明治17）年、旧向ヶ岡弥生町で、有坂鋁蔵らが弥生式土器第1号となる壺形土器を採集した（正確な出土地点は不明。本館所蔵、重要文化財）。この発見をきっかけに、この壺と同様な装飾などの特徴をもつ土器を「弥生式土器」、さらに弥生式土器が使われた時代を弥生時代と呼ぶようになった。こうして弥生式土器第1号の壺は、時代名の定着とともに学史的な重要性の高い資料となった。

今回の展示では、近年の本郷構内遺跡の発掘調査で新たに見つかった弥生・古墳時代の考古資料を紹介し、旧来の学術標本と比べることで新たな光を当てようと試みた（図1）。これらの考古資料は東京大学埋蔵文化財調査室に所蔵されている。

第一の資料は、浅野地区工学部武田先端知ビル地点からの出土品である。2001年、弥生時代後期後半の方形周溝墓2基が発掘され、周溝からは壺形土器（図2）が、埋葬施設からは24点のガラス小玉と4点の赤色石製管玉が出土した。過去の発掘調査によって、この方形周溝墓の北側には環濠集落が存在したことがわかっており、本地点はその集落の墓域として評価できる。本館が所蔵する弥生土器第1号壺は、集落をとり囲む環濠周辺のどこかから出土した可能性が指摘されている。

第二の資料は本郷地区医学部附属病院臨床試験棟地点の出土品である。先の浅野地区から小さな谷を一つ隔てた本郷地

区では、数十軒の古墳時代前期や中期の竪穴住居址が見つかった。今回の展示では、このうちの1軒から出土した小型土器4点と勾玉を出品した。本地点の竪穴住居址群の西側には、古墳時代の墓域も確認されている。以上の考古資料は、本郷キャンパス周辺に暮らした弥生時代から古墳時代にかけての人々の生活を復元するだけでなく、弥生式土器第1号壺をはじめとした旧来の学術標本との比較検討により、将来の学術研究を進展させる重要な素材となるだろう。

わずか3日間の展示であったものの、今回は370名の来館者に足を運んでいただいた。本館の展示ブースは会場入口付近に位置し、アンケートでは来館者の印象に強く残ったという回答が得られている。今後も文京ミュージックフェスタを通して、地域住民の方々にさらに本館を周知・理解いただく活動を継続していきたい。



（本館特任助教／西アジア考古学）



図1 文京ミュージックフェスタでの展示の様子。



図2 浅野地区の方形周溝墓から出土した壺形土器。

コレクション紹介

稀少魚類化石ナカガワニシンの第二標本の発見

佐々木猛智¹・宮田真也²・藪本美孝³・中島保寿⁴・伊藤泰弘⁵

古い標本を安易に捨ててはならない。これは博物館では当たり前のことであるが、多くの大学や研究機関では、残念ながら過去の研究者の標本が廃棄されたり、用済のものとして雑然と扱われている例がある。しかし、重要標本が誰にも気がつかれずに身近な所に埋もれている可能性がある。標本の扱いについて注意喚起を促す事例をひとつ紹介する。

発見の経緯

総合研究博物館の収蔵庫の奥に眠っていた古い化石の未整理標本の整理作業中に珍奇な魚類化石標本が発見された。専門的な検討の結果、これまでに1個体しか知られていなかった珍しい魚類の化石であることが分かり、2022年に論文として報告した (Miyata et al., 2022)。

標本の発見は、論文出版の10年前 (2012年) に遡る。その当時、地史古生物部門の収蔵庫にはかつて理学部2号館から移管されそのまま埃を被っていた標本が山積みになっていた。これらの標本は、総合研究資料館 (総合研究博物館の前身) が設立される前の標本で、古い標本では戦前のものからあり、長い間誰も

手を触れておらず、登録や整理もされていなかったものである。多くの標本は蓋の無い紙箱上に剥き出しに置かれていた。そのため、地震があれば箱から飛び出してしまい、他の標本と混同してラベルとの対応が復元できなくなることが容易に想像できた。佐々木は、1978年の宮城県沖地震の際に東北大学の標本箱がひっくり返り多数の標本が産地不明標本になってしまった失敗談を聞いていた。これらの古い標本はすぐに自分が研究する訳では無いが、このまま放置してれば標本が同じ運命をたどることが危惧されたため、大学院生の協力を得て少しずつ個別に袋に入れる作業を開始した。中島はこの作業中に珍しい魚類標本を発見し、魚類化石の専門家である宮田に連絡をとったことがこの研究のきっかけである。

標本の産地

多くの場合、化石標本の価値は産地情報にあり、そのため標本の価値は産地を記録したラベルによって決まると言っても過言ではない。今回紹介する標本のラベル (図1) に書かれていた情報は以下

の通りである。

Locality IK2013g1 北海道空知郡三笠町奔別川沿い露出, Horizon IIIa' Lower part of upper Yezo Group. Neogyliakian上部, Partially upper Turonian, 1955. T. Matsumoto & T. Omori

これを日本語表記にすると以下のようになる。

産地 IK2013g1 北海道空知郡三笠町奔別川沿い露出, 層準 IIIa' 上部蝦夷層群下部, ネオギリアキアン階上部, 部分的に上部チューロニアン階, 1955年松本達郎・大森保採集

この記録は当時のラベルの書き方としては詳細に書かれている方である。しかし、この情報だけからは奔別川沿いということ以外は具体的なことは分からず地図上に産地を表示できない。IK2013g1が何処を指すかということが問題であったが、この地点は採集者の松本達郎博士の著作を調べることで明らかになった。1965年のアンモナイトの論文 (Matsumoto, 1965) に露頭番号が書かれており、このことにより産地はピンポイントで特定された。

ラベル中に記されているNeogyliakian

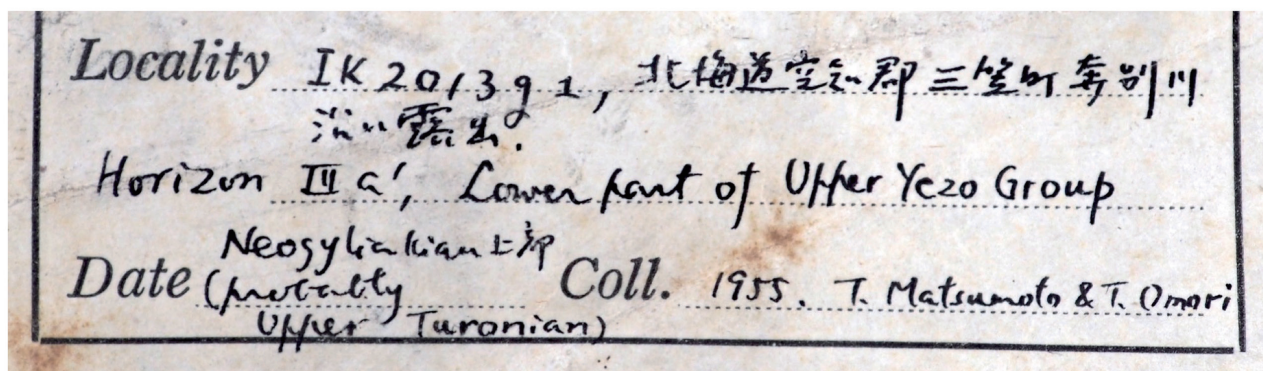


図1 標本ラベル。松本達郎博士と大森保氏が1955年に北海道三笠町の「露頭番号 IK2013g1」で採集されたことを示す。

は現在では用いられていない層序区分である。上部蝦夷層群 層準IIIa' は、最近の研究では羽幌川層に位置している。産出するアンモナイトとイノセラムス（二枚貝）の種構成、松本博士の論文に記載された産地の情報から、第二標本は、白亜系上部チューロニアン階から産出したものと特定できる。系（system）と階（stage）は地層の上下関係（層序）を示す用語であり、地質時代を表すには紀（period）と期（age）を用いる。従って、産出年代について言及する場合には白亜紀後期チューロニアン期（約9000万年前）となる。堆積環境は先行研究から陸棚域であることが明らかになっている。

産地の場所は地図で確認して緯度経度を入れることも可能になった。この度新しく作成したラベルでは産地情報は以下のように表記される。

北海道三笠市 奔別川沿い 露頭番号 IK2013g1 (Matsumoto, 1965) 43° 16' 33"N 141° 58' 33"E付近 蝦夷層群 羽幌川層 白亜系上部チューロニアン階. 1955年松本達郎・大森保採集。

第二標本の特徴

比較検討の結果、この化石はこれまで1個体（ホロタイプ）しか知られていなかった化石魚類ナカガワニシン *Apsopelix miyazakii* Yabumoto, Hikida and Nishino, 2012の第2標本であることが判明した。タイプ標本とは新種記載の基準となる標本であり、タイプ標本が複数存在する場合には代表的な1標本をホロタイプに指定するが、記載時に1個体しか無い場合はそれがホロタイプになる。ナカガワニシンのタイプ標本は中川町エコミュージアムセンターに収蔵されており、現在では北海道天然記念物（地質鉱物）に指定されている。

標本の状態で特筆すべきことは、化石が立体的に保存されていることである（図2）。魚類化石は一般に地層中で押しつぶされて平面的に保存されるものが多い。しかし、第二標本は変形が少なく、骨の配置が細部まで分かる状態で保存されていた（図3）。特に頭部の骨はよく保存されており、眼窩の後部にはタイプ標本では十分に保存されていなかった部分（例：主鰓蓋骨、眼下骨など）を見ることができる。そのため、ナカガワニシ

ンの種の特徴をより詳細に定義することができた。体長は37～39cm程度で、タイプ標本より10cm程度大きい個体であると推定された。

条鰭綱クロツグナス目魚類は海水魚類の絶滅したグループで、ジュラ紀のオックスフォード期に出現し、始新世に絶滅した。アプソペリックス属には2種が知られており、*Apsopelix anglicus*は北米やヨーロッパの白亜紀の地層から産出し、もう1種がナカガワニシン *Apsopelix miyazakii*である。タイプ標本は、2004年に北海道中川町の天塩川の支流から宮崎明朗氏が発見し、2012年に記載され宮崎氏に献名されたものである。地層中の産出地点は不明であるが、佐久層（チューロニアン）由来のものと考えられる転石から産出した。このタイプ産地は三笠地域より約200km北方に位置している。

博物館収蔵標本の意義

化石標本の中には50年や100年に1個体しか得られないような稀少な種が少なからず存在する。各地の大学や研究機関の倉庫の奥に放置されているものの中

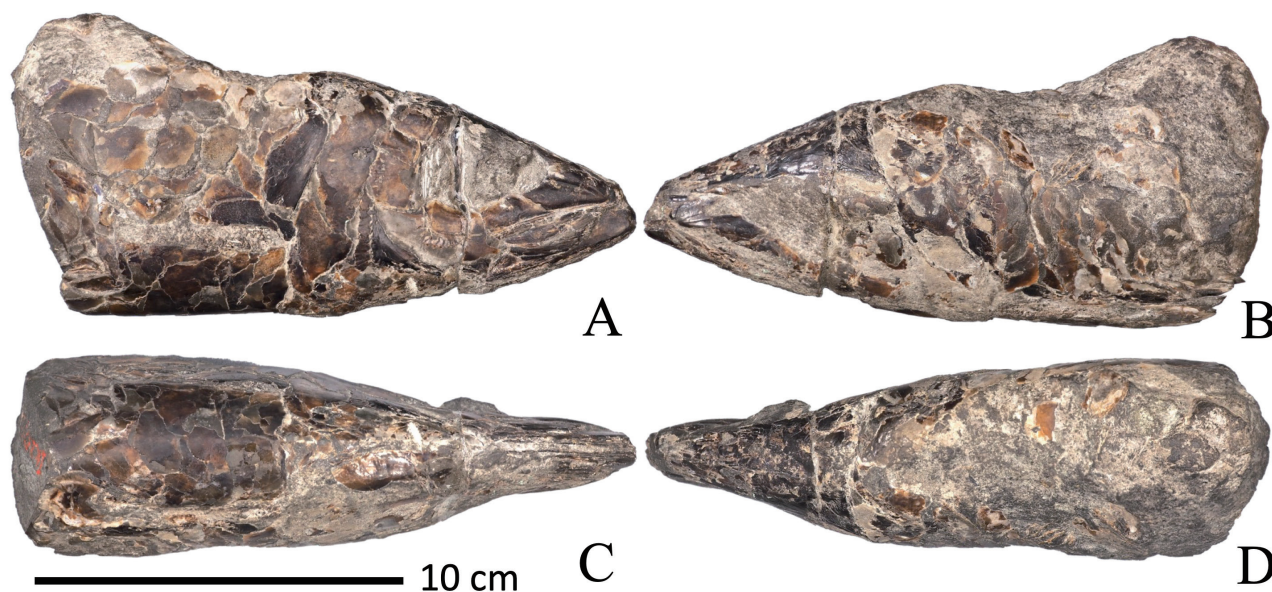


図2 ナカガワニシンの第二標本。標本番号 UMUT MV33390。A. 右側面。B. 左側面。C. 腹面。D. 背面。165 mm x 76 mm x 50 mm。

Ouroboros

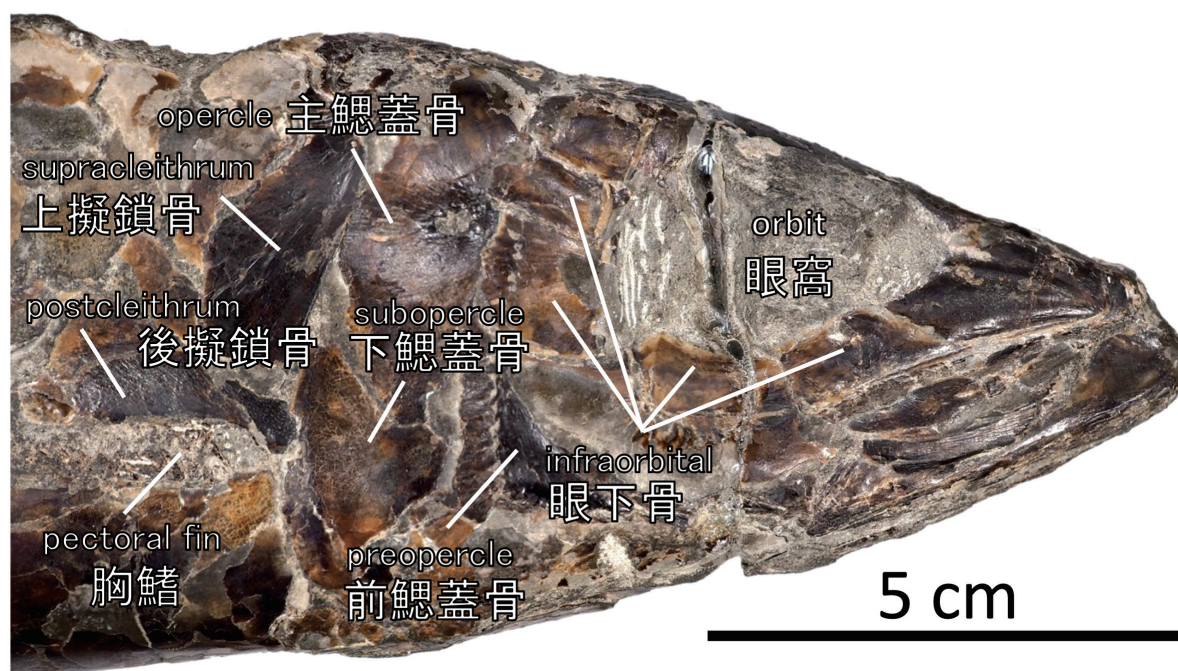


図3 ナカガワニシン第二標本の頭部骨格の主要部。第一標本（タイプ標本）には保存されていなかった特徴を見ることができる。Miyata et al. (2022: fig. 3C) に基づく。

には他にもナカガワニシンと同様の事例があるに違いない。現在生きている生物は生存可能な環境さえあれば繁殖して個体数が増えるが、化石は繁殖できないため時間と共に風化や浸食により地球上から失われる一方である。生命の歴史を記録する稀少な試料を確実に保存することが博物館の使命である。

引用文献

本稿で紹介した内容は主に以下の3編の論文に記されているものである。

Miyata, S., Yabumoto, Y., Nakajima, Y., Ito, Y. and Sasaki, T., 2022. A second specimen of the crossognathiform fish *Apsopelix*

miyazakii from the Cretaceous Yezo Group of Mikasa Area, Central Hokkaido, Japan. Paleontological Research, 26 (2): 213–223. (北海道三笠地域の白亜紀蝦夷層群から産出したクロッソグナス目魚類ナカガワニシンの第二標本)

Yabumoto, Y., Hikida, Y. and Nishino, T., 2012. *Apsopelix miyazakii*, a new species of crossognathid fish (Teleostei) from the Upper Cretaceous of Hokkaido, Japan. Paleontological Research, 16 (1): 37–46. (北海道の後期白亜紀から産出したクロッソグナス目魚類の

新種ナカガワニシン)
Matsumoto, T., 1965. A monograph of the Collignoniceratidae from Hokkaido Part I. Memoirs of the Faculty of Science, Kyushu University, Series D Geology, 16: 1–80, pls. 1–18.(北海道産コリンニョニセラス科のモノグラフ)



¹本館准教授、

²城西大学水田記念博物館大石化石ギャラリー学芸員・理学部助教、

³北九州市立自然史・歴史博物館名誉館員、

⁴東京都市大学准教授、

⁵九州大学総合研究博物館准教授

／¹⁻⁵古生物学)

案内 本館展示

特別展示『空間博物学の新展開／UMUT SPATIUM』

会期：2021年11月11日（木）～2023年2月3日（金）

開館日：水・木・金曜日（休日と重なる場合は振替はせず休館）

開館時間：10：00～17：00（入場は16：30まで）

会場：本郷本館展示場

主催：東京大学総合研究博物館

協力：IARU-国際研究型大学連合、株式会社クリモト

IMT展示

インターメディアテク開館十周年記念特別展示『極楽鳥』

会期：2023年1月20日から2023年5月7日

会場：インターメディアテク3階

主催：東京大学総合研究博物館+レコールジュエリーと宝飾芸術の学校

特別展示『被覆のアナロジー——組む衣服／編む建築』

会期：2022年11月5日から2023年4月2日

会場：インターメディアテク2階「GREY CUBE（フォーラム）」

主催：東京大学総合研究博物館

共催：株式会社Ri Design | 隈研吾建築都市設計事務所

スクール・モバイルミュージアム

『東大地質図コレクション』

会期：2022年11月29日（火）～2023年3月31日（金）

開館時間：9：00～17：00

休館日：日曜日・祝日

会場：文京区教育センター2階「大学連携事業室」

主催：東京大学総合研究博物館

共催：文京区教育センター

問い合わせ先：03-5800-2591（文京区教育センター）

ニュース

東京大学コレクション未来基金

本館に収められた膨大な学術標本資料の保管機能と展示機能の改善を図るため、「東京大学コレクション未来基金」事業を立ち上げました。詳細は本誌6～8ページをご覧ください。

IMT展示

インターメディアテクでは、以下の展示を公開いたしました。

・2021年4月27日～2022年9月4日 特別展示『仏像工学——追体験と新解釈』

・2022年4月16日～2022年12月11日 特別公開『音のかたち——東京大学蓄音機コレクション』

・2022年4月26日～2022年7月18日 特別展示『プロトログ——山中俊治デザインの発生学』

スクール・モバイルミュージアム

文京区教育センターにて、2022年5月13日～10月31日に『蝶——魅惑の昆虫——』を公開いたしました。

小石川分館イベント

小石川分館では、館外イベント『AnnEX Lab.ソトラボ』として、以下を開催しました。

・第4回『東大植物学教室が「時計台」にあった頃』

日時：2022年9月30日（金）、講師：池田 博（本館准教授／植物分類学）

受賞

UMAC Award 2022で当館（特別展示＋出版プロジェクト『蘭花百姿——東京大学植物画コレクションより』）がSecond Placeを受賞しました。この賞は、ICOM（国際博物館会議）の国際委員会の一つであるUMACが大学博物館とコレクションに関する優れた取り組みを表彰するものです。また、矢後勝也講師（昆虫自然史学、保全生物学）が日本昆虫学会の2022年度「あきつ賞」を受賞しました（下図）。この賞は昆虫学の発展に貢献する優秀なウェブサイトを作成した会員に表彰するもので、当館データベース「UMDB 昆虫」が受賞対象と



日本昆虫学会「あきつ賞」の授賞式

なりました。あきつとはトンボの古い呼び名に由来します。

出版

・『プロトログ——山中俊治デザインの発生学』

監修：西野嘉章・山中俊治

発行：東京大学総合研究博物館（2022年1月15日）

・『蘭花百姿——東京大学植物画コレクションより』

編者：東京大学総合研究博物館

発行：誠文堂新光社（2022年5月20日）

・『東京大学総合研究博物館動物部門所蔵 魚類標本リスト(2)』東京大学総合研究博物館標本資料報告第129号

著者：小枝圭太・上島 励

発行：東京大学総合研究博物館（2022年6月30日）

本館来館者

事前に申し込みのあった主な本館来館者は以下のとおりです（2022年7月12日～9月29日、敬称略）。

東京大学教育学部附属中等教育学校、東京都立上野高等学校、清泉女学院高等学校、新潟県立国際情報高等学校、福岡県立嘉徳高等学校、東京都立日野高等学校、文京区立本郷第二育成室、静岡県立富士高校、群馬県立前橋高等学校、大阪府立四條畷高等学校、アトリエFELT花澤、東洋大学附属姫路中学校・高等学校、滝川第二高校、福岡県立伝習館高等学校、子ども未来館、世田谷区立駒留中学校科学部

ボランティアのご協力

本館では、2022年4月14日から2022年9月30日の間、下記15名の方々にボランティアとしてご協力いただきました。

飯田義重、飯干ユミ、金子清敏、佐藤れい子、添田禮子、竹下勝人、成岡須美子、兵頭 勝、船窪英子、古川真由美、星 佳子、細野 剛、山田節子、渡邊淳子、金子清子（敬称略）

インターメディアテクでは、2022年4月1日から2022年9月30日の間、下記16名の方々にIMTボランティアとしてご協力いただきました。

伊藤 光、尹 杰、柏 勇希、栢場美帆、北里萌音、越田勇氣、古藤 南、坂本柚香、永田柊弥、袴田光平、山極瑞夕、村上七海、森 瑠璃、谷地美翔子、山口菜月、李 牧（敬称略）

小石川分館では、2022年4月1日か

Ouroboros

ら2022年9月30日の間、下記の1名の方に小石川分館ボランティアとしてご協力いただきました。

成田佳恵 (敬称略)

博物館教職員

2022年4月30日付けで小寺直子事務補佐員が退職しました。同年5月19日付けで小枝圭太特任助教が退職しました。同年7月1日付けで塚木千紗乃事務補佐員が、7月16日付けで渡辺早代技術補佐員が、8月16日付けで金銀眞学術専門職員が着任しました。同年8月31日付けで逸見良道特任研究員が、9月30日付けで久保泰特任研究員が退職しました。また、2022年10月1日付けで野内公一上席係長が柏地区共通事務センターへ異動して和田妃央一般職員が産学協創部から当館に配置転換しました。

現在の博物館のスタッフは以下のとおりです。

館長

西秋 良宏

研究部

キュラトリアル・ワーク研究系

教授 遠藤 秀紀

(比較形態学、遺体科学)

教授 海部 陽介

(人類進化学、形態人類学)

准教授 池田 博

(植物分類学)

准教授 佐々木 猛智

(動物分類学、古生物学)

講師 矢後 勝也

(昆虫自然史学、保全生物学)

特任研究員 工藤 光平

(人と動物の関係学、機能形態学)

博物資源開発研究系

教授 西秋 良宏 (先史考古学)

教授 三河内 岳

(惑星物質科学、鉱物学)

教授 (兼任) 宮本 英昭 (惑星科学)

博物情報メディア研究系

准教授 森 洋久 (情報工学)

助教 金崎 由布子

(アンデス考古学)

放射性炭素年代測定室

教授 米田 穰

(年代学、先史人類学)

特任研究員 尾寄 大真

(年代学、宇宙・地球化学)

特任研究員 大森 貴之

(年代学、分析化学)

特任研究員 齋藤 誠史

(地球化学、考古科学)

タンデム加速器分析室

教授 松崎 浩之

(加速器質量分析、同位体地球化学)

特任研究員 宮田 佳樹

(考古科学、文化財科学)

技術専門職員 土屋 陽子

(加速器質量分析試料調整、分析化学)

技術職員 徳山 裕憲

(加速器技術、加速器質量分析)

小石川分館

担当教員・助教 金崎 由布子

(アンデス考古学)

特任研究員 永井 慧彦

(彫刻、金銅仏製造)

マクロ先端研究発信グループ

特任助教 三木 健裕

(西アジア考古学)

ミュージアムテクノロジー寄付研究部門

担当教員・教授 西秋 良宏

(先史考古学)

特任教授 洪 恒夫(展示デザイン)

特任教授 松本 文夫(建築学)

特任助教 白石 愛(博物資源学)

インターネットメディアテック寄付研究部門

IMT館長・教授 西秋 良宏

(先史考古学)

特任准教授 関岡 裕之

(博物館デザイン)

特任准教授 松原 始

(動物行動学)

特任准教授 寺田 鮎美

(文化政策、博物館論)

特任助教 菊池 敏正

(文化財保存学)

特任研究員 中坪 啓人

(動物学)

特任研究員 上野 恵理子

(建築、美術解剖学)

顧問(名誉教授) 西野 嘉章

(博物館工学、美術史学)

太陽系博物学寄付研究部門

担当教員・教授 宮本 英昭

(惑星科学)

国際デザイン学寄付研究部門

担当教員・准教授 森 洋久

(情報工学)

特任研究員 大澤 啓

(美学、美術史学)

東京大学特別教授

特任教授 諏訪 元

(自然人類学、古人類学)

特招研究員

秋篠宮文仁(生き物文化誌学)

林 良博(国際動物学)

大場 秀章(植物分類学)

田賀井 篤平(鉱物学)

吉田 邦夫(年代学、考古科学)

諏訪 元(自然人類学、古人類学)

*スタッフは2022年10月現在で掲載

Ouroboros 第74号

本号の内容は本館ホームページ (<http://www.um.u-tokyo.ac.jp/>)
でもご覧になれます。多くの写真はカラーです。

東京大学総合研究博物館ニュース

発行日：2023年1月20日

編集人：佐々木猛智・矢後勝也・金崎由布子

発行人：西秋 良宏

発行所：東京大学総合研究博物館

住所：東京都文京区本郷7丁目3-1

郵便番号：113-0033

電話：050-5541-8600 (ハローダイヤル)

F a x : 03-5841-8451

E-mail: web-master@um.u-tokyo.ac.jp

Designed by Ken Sakamura

Printed in Japan

ISSN 1342-3614